

# 猿新聞

編集責任者  
山村 準

tel:0595-63-1725

Email

jyun.y@asint.jp

名張鳥獣害問題連絡会

発行部数

【全戸回覧】

錦生地区：100部

赤目地区：150部

箕曲地区：70部

ひなち地区：220部

つつじが丘：430部

【全戸配布】

国津地区：380部

市民センター：90部

(9地区)

名張市議会：20部

名張市役所：30部

## 集落環境改善と 対・獣害意識改革

今や獣害は、過疎・高齢化や人口減少が加速する人間社会を凌駕しつつあり、もはや行政主導や個人での技術論では対抗しきれない状況となってきました。

中山間地域における人口の減少や高齢化、生活スタイルの変化などによって、人間活動が低下していることも鳥獣被害が増える要因となっています。かつては里山として人間の影響があった森林も、管理や炭焼き、狩猟などで出入りする人がいなくなり、シカやイノシシ、サルといった動物による被害は中山間地域を中心に深刻化が進んでいます。

農林省によると、農林業被害のうち、特に大きいのがシカやイノシシによる被害で、農作物被害は実に被害額全体の6割以上に及びます。また、森林の被害面積については全国で年間約7・000ヘクタールに達しているとの報告が、シカによる被害が約8割を占めています。

鳥獣被害は農林業に多大な被害をもたらすだけでなく、営農意欲の減退や耕作放棄地の増加にもつながり、被害額として数字に表れる以上の影響を農山村に対して与えています。加えて森林破壊、希少植物の食害など生態系への影響も問題となっています。

さらに、野生鳥獣の個体数が増加傾向にあります。環境省の調べによると、シカの推定個体数は平成25年度末において約305万頭。これは、平成元年の約30万頭から四半世紀で約10倍に増加したことになります。さらに、現在の捕獲率を維持した場合、2025年には約500万頭にまで増加し、今以上に大きな被害をもたらす恐れもあるのです。

この現状を踏まえ2013年環境省・農林水産省が対策の一つとして、「抜本的な鳥獣捕獲強化対策」を策定。2023年までにシカ・イノシシの生息数を半減させることを目標として掲げて、シカについては、2011年度実績の2倍以上の捕獲を実施しなければなら

ない国策が、獣害問題・農業問題など社会問題の要因となっていて被害を被っているのは、中山間地域住民です。野生鳥獣の被害をなくすためには、個体数をコントロールすることが重要ですが、鳥獣が寄り付く環境を作らないようにすることが非常に重要になります。

人間が平野を使い尽くし、野生動物を奥山に追いやった歴史があります。耕作放棄地の増加や、山間地域の過疎・高齢化による人圧の低下などで、今や野生動物は平野部にリターンをしてきているのです。

野生動物は行動のほとんどを餌探しで占められています。集落周辺の「食べても人間が怒らない餌」の意識改革を行わない限り、鳥獣にとって「格好の餌場が集落に存在する」といった考えが芽生えることとなります。

放任果樹を撤去したり、山際の藪を刈って緩衝地帯を作ったり、耕作放棄地を刈り払ったりして鳥獣の隠れ場所や通り道をなくすなど集落や農地周辺の環境改善が、鳥獣と人間の住み分けに繋がります。

私たちは知らず知らずのうちに野生動物に餌付けを行い、誘引し、隠れ場所まで提供しているということを自覚し意識改革を図ること

が重要になります。ただし、これらの対策は一度限りのものではなく、継続的に実施していくことが必須で、地域が一丸となって、それぞれの要素について確実に対処できる体制を整えていくことが重要な課題となります。

近年、気象変動などによる生息環境の変化により、絶滅が危惧される生物が増加している一方で、特定の鳥獣による生活環境や農林水産業、生態系に係る被害が増加しているなど野生動物を取り巻く環境は、時代と共に変化しています。

いつの時代でも私たちは人間は、人の価値観で野生動物を見ていますが、総合的な見地から鳥獣の保護及び管理を推進するとともに、人と野生鳥獣が共存し、生物の多様性を維持していくことが、今後の私たちに課せられた重要な課題です。

近代化が進むにつれは人と自然との関わりが希薄化しています。それは都市だけのことでなく、中山間地域でも生活と自然が背を向き合ってしまったという状況が、再び自然との関わりを取り戻すには、今の時代や社会背景にあった新しい関わり方を作り上げていかなければならないと考えます。

「何故、このようにシカなどの野生動物が急増したのでしょうか」

まず、国政による保護政策があげられます。明治時代からいくつもの保護策はとられていきましたが、昭和23年には全国的に雌シカが狩猟から外される保護政策が始まりました。昭和53年には雄シカの捕獲数も1日1頭に制限されるなどの保護管理が行われ、シカの数もV字回復を遂げました。何故か、回復後も保護政策は平成2年ごろまで続きました。

今、政府が掲げる「抜本的な鳥獣捕獲強化対策」は、「増えたら殺せ、減ったら保護」という「泥縄」感はありません。狩猟人口の減少などを考えるとき、ハードルの高い対策だと思わざるを得ませんが、森林を末長く健全な状態に保全するためには、生息域の密度などを考慮した適切な捕獲・狩猟を行うことが必要で重要なことになりそうです。しかし、国が推進する獣害対策は獣害問題を野生動物問題と位置付け、動物と

の対処方法を主要な論点として「獣対策」への変質感を感じず、農業問題として農家目線での対策は置き去りにされているような気がします。

さらに国政による拡大造林政策を実施。天然林などの伐採で出た当時の草地は、シカの好ましい環境となりシカの急増に繋がっています。現在の日本の森は、木の使い過ぎによる危機ではなく、木を使わなくなったことによる歴史上初めての危機を迎えています。

荒廃した森では野生動物は棲めず、本来ならば奥山にいるはずの野生動物が里に出てくるのは当然のことです。「国の宝は山なり。山の衰えは則ち国の衰えなり」。

このように先が読めない国策が、獣害問題・農業問題など社会問題の要因となっていて被害を被っているのは、中山間地域住民です。

野生動物は行動のほとんどを餌探しで占められています。集落周辺の「食べても人間が怒らない餌」の意識改革を行わない限り、鳥獣にとって「格好の餌場が集落に存在する」といった考えが芽生えることとなります。

近代化が進むにつれは人と自然との関わりが希薄化しています。それは都市だけのことでなく、中山間地域でも生活と自然が背を向き合ってしまったという状況が、再び自然との関わりを取り戻すには、今の時代や社会背景にあった新しい関わり方を作り上げていかなければならないと考えます。

その上で地域の実情に見合った被害防止技術を、私たち自身の意識改革を通して求めていく必要があります。また、鳥獣害防止対策において、先人からの口伝である所謂「農村伝説」があります。信憑性の低いものも多く、これに惑わされてしまうと正しい被害対策ができなくなっ

てしまいます。特に山間地域では「農村伝説」からの早急な脱却が必要です。

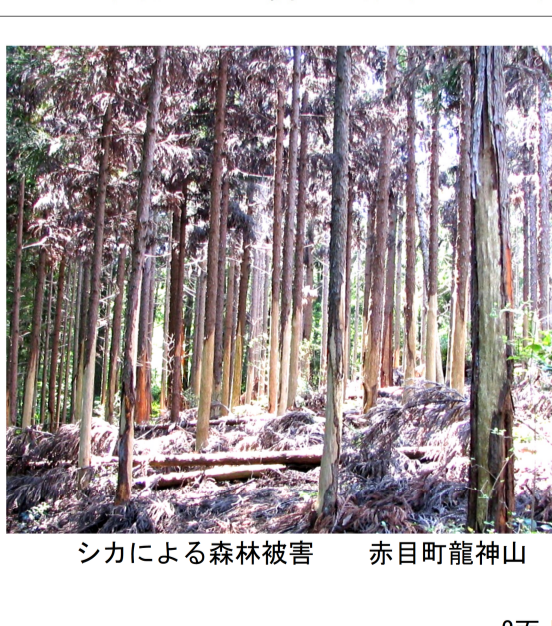
中山間地域における人口の減少や高齢化、生活スタイルの変化などによって、人間活動が低下していることも鳥獣被害が増える要因となっています。かつては里山として人間の影響があった森林も、管理や炭焼き、狩猟などで出入りする人がいなくなり、シカやイノシシ、サルといった動物による被害は中山間地域を中心に深刻化が進んでいます。

農林省によると、農林業被害のうち、特に大きいのがシカやイノシシによる被害で、農作物被害は実に被害額全体の6割以上に及びます。また、森林の被害面積については全国で年間約7・000ヘクタールに達しているとの報告が、シカによる被害が約8割を占めています。

鳥獣被害は農林業に多大な被害をもたらすだけでなく、営農意欲の減退や耕作放棄地の増加にもつながり、被害額として数字に表れる以上の影響を農山村に対して与えています。加えて森林破壊、希少植物の食害など生態系への影響も問題となっています。

さらに、野生鳥獣の個体数が増加傾向にあります。環境省の調べによると、シカの推定個体数は平成25年度末において約305万頭。これは、平成元年の約30万頭から四半世紀で約10倍に増加したことになります。さらに、現在の捕獲率を維持した場合、2025年には約500万頭にまで増加し、今以上に大きな被害をもたらす恐れもあるのです。

この現状を踏まえ2013年環境省・農林水産省が対策の一つとして、「抜本的な鳥獣捕獲強化対策」を策定。2023年までにシカ・イノシシの生息数を半減させることを目標として掲げて、シカについては、2011年度実績の2倍以上の捕獲を実施しなければなら



シカによる森林被害 赤目町龍神山 2面上段へ

## 鹿を知ろう シリーズ②

日本に生息するニホンジカはエゾシカ、ツシマジカなど7亜種がいます。中でも本州で暮らすホシシやシカは、奈良公園や広島県の宮島では町の「顔」となっています。人懐っこい印象がありますが基本的には臆病な動物です。環境省の推計によると、野生のニホンジカの個体数は2015年度では約30万頭で、05年度から10年間で約2倍に増加したとされています。鹿は本来、薄明薄暮性であり、日の出前と日没直後の薄明い時間帯に活動する動物です。ところが、日本で鹿が夜間目撃されることによくありますし、鹿と車の交通事故なども夜よく起こっており、

鹿は夜行性のようには思えますが、これは、鹿が人間の行動に合わせて行動時間を変えた結果なのです。シカの社会は一夫多妻制の社会で、群れを作ります。成獣のオスとメス別々に群れを作ります。メスの群れは、母親を筆頭にその母から生まれたメスの子供たちで形成されます。オスは生後1〜2年で生まれた群れから離れ、オスだけで群れを作ります。また、群れは流動的なものではなく流動的で、森林の中では小規模な群れを形成し、開けた草原などでは合流して大規模な群れを作り、オスとメスは別々に暮らします。繁殖期には、オス同士が争って強いオスが複数のメスを困い込みます。そのため、シカの社会は一夫多妻制の社会で、オスの一部はナワバリを作り、その中にハーレムを形成します。

鹿の行動範囲はとて  
も狭く、50.5〜2平方キ  
ロメートルの範囲内で  
休息と食事を繰り返し  
ています。

鹿は学習能力が高い  
です。少なくとも犬や  
猫と同等の学習能力が  
あると言えるでしょう。

牛と同じ反芻動物で  
あるシカは、アセビな  
ど一部の有毒な植物を  
除き1,000種を超  
える植物の葉、芽、樹  
皮や果実を餌としてい  
て、その量は1日約3  
kg超。シカにとっては、  
農作物だけでなく集落  
周辺の雑草の大半が餌  
となります。レンゲや  
クローバー、ナンテン、  
サカキなどの植木も食  
害します。捕食者不在  
の草食獣のシカは、餌  
の供給量によって繁殖  
状態や死亡率などが変  
化します。シカにとつ  
て餌の供給量の多少が  
生死に関わる最も重要  
なことなのです。

シカの密度が高い地  
域の森林では、シカの  
食害によって、高さ2  
m以下の林床の植物が  
ほとんど消失して異様  
な景観を呈しているこ  
ろもあります。

近年、列車遅延など  
を度々引き起こしてい  
る鉄道事故の原因で、  
圧倒的に多いのはシカ  
要因は、鉄分を補給す  
るために線路をなめに  
くるためだといわれて  
います。

※記事の訂正  
4月号「シカを知ろう」  
シカの寿命は雄12〜15  
歳、雌20〜25歳に訂正。  
尚、シカ寿命についての  
記事が重複していたこと  
をお詫びいたします。



チキッ一服

ねずみの話

今年の干支はネズミで  
す。12支の1番目です。ネ  
ズミと人間の関りは古く、  
弥生時代からあったらしい  
です。遺跡から穀物を貯蔵  
していた高床式倉庫にネ  
ズミ返しが発見されていま  
す。人間とネズミの間には  
多くの昔話があります。ネ  
ズミ浄土(おむすびごころ)  
など、ネズミは、人間が寝  
ている間に食料を盗むから  
「寝盗み」、地下(根の国)  
などに語源とされています。  
人間とネズミの間には、悪  
い話ばかりではありません。  
ネズミは大黒様の使いとも  
言われ神聖されました。  
正月3ヶ月の間は、ネズミ  
を「嫁が君」と呼ぶ風習の  
地域があります。供えた餅  
をネズミに取られたら「ヨメ  
ゴが来て餅を引いていった」  
と言うのです。なんと心豊  
かな人たちだったのでしょ  
うか。ネズミがいなくなるの  
は、火事や地震の前兆だ  
と言い伝えがあります。「年  
寄りとネズミの居らぬ家は  
ろくな事はない」と言うこと  
わざもありません。長野県上  
田市には、こんな話があり  
ます。千曲川と、よく肥え上  
田小島の平野が、ネズミに  
よって出来たと言うのです。  
昔々湖と山の間で狭い土  
地を耕して暮らしていた人々  
の村にネズミの大群が居  
ついて、村の食べ物を荒ら  
し回りました。村人たちは  
固まり宮猫を連れてきて来  
ました。ネズミは岩山を食  
い破って逃げ回りました。  
岩山が破れ、湖の水が村  
に流れ込み、千曲川が  
出来、湖の座には上田小島  
の肥えた平野が出来たそ  
うです。私たち人間は「獣  
害」と言うことで、全ての動  
物をとらえるのではなく、動  
物との共生を考えて行かな  
ければいけないのかもしれ  
ません。

文・田村 修市

サル基礎知識

今回は サルの基礎知識に  
ついてお話しいたします。

名張市・宇陀市・伊賀市青  
山町・津市美杉にまたがる野  
生のサルは環境の変化に伴い  
「里サル」となっています。  
すなわち集落に依存しなけれ  
ば生きていけないサルたちの  
ことです。「ニホンザル」  
(学名 *Macaca fusata*) 分類  
サル目・オナガザル科・マカ  
ク属です。

以下 地獄谷野猿公苑の  
「ニホンザルについて」を参  
考にニホンザルの基礎知識の  
概要をお話しします。

世界的に見てニホンザルは、  
人を除く霊長類のなかで最も  
北に棲むサルとして知られて  
います。

中でも、北海道と琉球列島を  
のぞいた日本列島の主として  
広葉樹林帯に広く分布してい  
ます。

オスの平均体重は12〜15kg  
メスは8〜13kg。体長はオス  
で54〜61cm、メスは47〜60cm。  
尾は短くオスが8〜12cm、メ  
スが7〜12cmほど、歯は人と  
同じで乳歯が20本永久歯が32  
本です。体温は38.6度で人より  
高めです。大人になると顔や尻  
が赤くなるのもニホンザルの  
特徴です。

ニホンザルは主に植物を食  
べます。春は新芽、若葉、草  
秋には果実や木の実を好んで  
食べます。昆虫も好物です。

ニホンザルの社会は群れを  
つくって暮らしています。数  
頭の大人のオス、その2、3倍の  
大人のメス、そしてその子ど  
も達で群れは成り立っていま  
す。

メスは基本的に生まれた群  
れで一生を過ごしますが、多  
くのオスは性成熟期になると  
群れを出ていきます。その後  
ヒトリザルとして行動します。  
所謂ハナレザルです。やがて  
どこかの群れに加わります。そ  
して生涯に渡って、いくつか  
の群れを点々と移動するよう  
です。群れは、大人のメスと  
その子供の血縁関係で構成さ  
れていて、いわゆる母系的社  
会です。

ニホンザルは昼行性です。  
夜は樹上で、抱き合ったり、  
あるいは単独でしゃがんだ姿  
勢で眠ります。巣は作らず泊  
まり場は毎日変わります。夜  
明けから日没まで食物を探し

たり休息したり遊んだりしな  
がら、群れでゆっくり移動し  
ます。繁殖期は10月〜12月で  
す。出産は4〜6月にかけて  
です。妊娠期間は173日で一産  
一子。概ね一年おきに出産し  
ます。寿命は25年〜30年です。  
平成7年、和歌山県におい  
て台湾ザルが確認され、ニホ  
ンザルと交雑して、自然環境  
を壊す存在として問題になり  
和歌山県としてこのサルの根  
絶を実施されて2017年12  
月22日(平成29年)までの  
24年間に渡る根絶の取り組み  
が成功し、和歌山県知事より  
根絶宣言が出されました。こ  
の様な事にならない様に私た  
ちも動物を飼う時は責任を持っ  
て生涯飼育してください。名  
張市でも捕獲した時必ず尻尾  
の長さ計って確認をしていま  
す。何故なら台湾サルの特徴  
は尻尾が長いからです。  
もしかしたら、名張にもい  
るかもと考え注意が必要です。  
次号からは平成15年度か  
ら名張地域のサルの行動を  
調査した経験に基づき生態  
についてお話しします。

文・古川 高志

サル出没状況

A群移動状況  
A群情報 古川 高志  
今月はひなち湖と青  
蓮寺湖周辺に集中して  
出没しています。  
つつじが丘では「きん  
かん」の食害が出てい  
ます。この時期腹いっ  
ぱい食べられる物はな  
いのです。以前はダムで  
はクズの実を食べるの

が多かったですけど、  
今は何でしょうか。  
B群移動状況  
B群の遊動域は非常  
に狭く、大和龍口、伊  
賀竜口、西谷周辺を遊  
動している「居着き」  
状態になっています。  
遊動域が狭いという  
ことは、その遊動域内  
に餌が豊富にあるとい  
うことに他ありません。  
伊賀竜口、西谷周辺

の皆さんは、再度、集  
落点検を行い春・夏野  
菜に備えて下さい。  
昔は、B群の遊動域  
は非常に広大で、東は  
錦生北部・星川、西は  
榛原付近、南は室生。  
北では、笠間付近でB  
群の個体が目撃されて  
いました。  
それが大量捕獲以降  
個体数が激減し、現在  
の状況になってます。

現在、十四五頭の  
個体が確認されていま  
すが、今後、個体数の  
増加は火を見るよりも  
明らかです。  
大量捕獲後3年、サ  
ル被害は皆目無くなつ  
た地域は多々あります。  
だが、油断は禁物です。  
集落周辺にサルを誘  
因する餌を除去するな  
ど「転ばぬ先」の対策  
が必要です。

